

平成28年度

危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・与論

大会宣言骨子

平成21年2月、国際連合教育科学機関（ユネスコ）が、“Atlas of the World’s Languages in Danger”を公表した。この中には、日本で話されているアイヌ語、八丈方言、奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言の8言語・方言が含まれていた。

文化庁では、この発表を受けて、研究機関の協力の下、8言語・方言の実態調査を行い、ユネスコの指摘のとおり消滅の危機にあることを確認した。さらに、ユネスコ指摘の言語・方言のみにとどまらず、震災などの自然災害の被災地や過疎化にさらされた地域の方言も、同様に危機的な状況に置かれていることも併せて確認した。その上で、危機的な状況を改善するために、危機的な状況や取組事例を知り、それら言語・方言の価値を理解してもらう場として、平成26年から「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催している。

言語の多様性は文化の多様性の基盤であり、文化の活力の源である。そして、生まれ育った地域の言葉は他に代え難い重要な役割を持つ宝である。

これらのことにいち早く気付いた与論町では、ユネスコの発表以前から与論の言葉（ユンヌフトゥバ）の継承の取組を始めていた。その先進性と成果に学ぶとともに各地の消滅の危機にある言語・方言の置かれている状況を踏まえ、次のことを宣言する。

ユンヌフトゥバをはじめとする消滅の危機にある言語・方言の継承のために、祖父母世代、親世代が家庭や地域において自信を持って積極的に地域の言語・方言を使用し、子供たちが自然とそれに触れられるような環境を作り、子供たちの使いたい気持ちをくじかないような寛容な接し方が広まるよう、本サミットで生まれたつながりを生かし、それぞれの地域において必要な取組を進めていく。